



「P-1グランプリ」。それはリフォーム実績年間2万件以上を誇るパナソニックエイジフリーの社員が、「プランナーとしての人間力」「プランニング力」「プレゼン力」を競い合う、年に1度の社内コンテストだ。2001年から始まり、毎年開催されている。今回はパナソニックエイジフリー近畿リフォーム課の住環境プランナー大澄一輝さんが手がけた事例を紹介する。

Yさん（80歳代・男性）は数年前に Parkinson病と診断され、発熱を機に軽度認知症に。リフォームの依頼が来た時は要介護3で、生活行為全般に、程度の差はあれ何らかの介助が必要な状態だった。特に困っていたのが、外出の際玄関から駐車場に出るまでに9つの段差があること。デイサービスを利用してYさんは、送迎車まで必ず妻の支えが必要で、靴を履き始めてから駐車場までに約12分もの時間を要していた。

すでにYさんの担当ケアマネジャーからは「段差部分に連続手すりを設置する」というケアプランが提案されていた。だが、大澄さんの頭に浮かんだのは、「本当」に手すり案が最適なのだろうかという疑問だった。手すりを付けても段差を越えなければならず、移動距離も時間も変わらない上、デイ以外の外出ではやはり妻が1人で介助しなければならぬからだ。また、妻によると



大澄さん

## 『山をこえ川をこえ』

——段差解消リフトの導入で  
家の出入りが安全・安心

の遠慮など、Yさんには「心のブレーキ」がいくつもあつたのではと大澄さんは推察した。

「本人も介助者も、負担なく安全に屋外へ行くことができるようにする」「ご夫婦で散歩に出かける」という目標を設定し、手すりではなく昇降機を使うことを検討した。まず、リビングの外にウッドデッキを新たに作り、リビングから車いすでデッキに出る。その上で、駐車場に隣接する庭に、機械式の昇降機を使って出入りするプランを提案した。さらに実際の動作確認を繰り返した上で、最終的にリビングから動線が直線で降りられ、車いすで方向転換もでき、日光浴も可能なウッドデッキと、移乗補助用のベストポジションバー、昇降機をレンタルするプランに決定した。

その結果、約12分かかっていた駐車場までの移動は半分以下の5分30秒に短縮。外出時の段差昇降に介助は必要なくなった。すると休みがちだったデイにも楽しんで行くようになり、新たに「病気になる前に妻と行っていい景勝地に行きたい」という希望も話すようになった。大澄さんは、建築的な視点と介護リフォームの目線の両方からポイントや注意点を考え、悩むこともあった。だが、ご本人が目を見開くほど変化し、精神的な自立支援もできて自信につながった」と振り返った。

黒田能隆統括部長は、「外出が大変でおっくうになると、地域交流も減り、社会参加がしにくくなります。今回のプランは、動線と段差解消、そして時間に着目し、結果として、お客様のQOLが向上した良い事例」と評価した。



改修後



改修前



くらしの中で「できる」ことを増やし、そして、次に「やりたい」ことに向かっていただきたい、そんな思いをシンボルマークにしました。パナソニックの介護用品で「心身が前向きに、その先に歩みだす」。私らしくいきいきとしたくらしを実現できる社会を創ることそれが私たちの存在意義です。



パナソニック エイジフリー

エイジフリーショップ

お問い合わせ先：営業企画部 06-6908-8122

